

国立国語研究所学術情報リポジトリ

沖永良部語正名方言の疑問文

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002481

沖永良部語正名方言の疑問文

ハイス ファン・デル・ルベ*¹

はじめに

本稿は、沖永良部語正名方言の疑問文の形式とその使用を考察する。資料は、2013年以来収集したものである。資料提供者（話者）は、M.F. (1936 女性)，H.T. (1950 男性)，N.N. (1942 男性) の3人である。

日本語記述文法研究会 (2003) によれば、疑問の定義は、次のとおりである。

疑問は、その命題に対して話し手の判断がなりたないことをあらわす。疑問の中心的な機能は、質問である。典型的な質問には、①話し手に不明な情報があるため判断がなりたらず、②聞き手に問いかけることによって疑問の解消をめざすという2つの基本的性質がある。質問の2つの基本性質のうち、①を欠くのが確認要求の疑問文であり、②を欠くのが疑いの疑問文である。確認要求の疑問文や、疑いの疑問文のほかにも、質問を行う時点での話し手の見込みや、状況や文脈との関係、あるいは情報の得られ方などから疑問文にはさまざまな大部が存在する。

一番典型的な疑問文は、①と②という特徴を両方もち、聞き手から情報を引き出すことを目的とする。

上に述べた2つの性質の中の1つが欠けている疑問文もある。たとえば、確認要求の疑問文は、話し手の判断がなりたっていないという性質が欠けており、疑いの疑問文は、聞き手に問いかけるという性質が欠けている。

疑問文が疑問終助詞によってマークされる点は、北琉球語群に属している言語変種の中で広く見られる特徴である。沖永良部の東側の諸方言 (Van der Lubbe & Tokunaga 2015: 362) とことなり、沖永良部語正名方言でも、疑問が終止形として機能する語形につく終助詞によってマークされる。話し相手が言ったことがそのまま繰り返される問い返し疑問と、nu? 「何?」?itji? 「いつ?」などのように1つの疑問詞による疑問だけに助詞がつかないこともある。

「疑問文は、話し手にとって何が不明なのかという観点から、真偽疑問文 (= 肯否疑問文, yes-no question/polar question), 選択疑問文 (alternative question), 補充疑問分 (疑問詞疑問文, wh-question/content question) の3のタイプに分けられる。

確認要求や疑いは、疑問たらしめる2つの性質の中の1つを欠いているが、疑問には属する。修辞疑問は、特徴①を欠いているが、②聞き手に問いかけることによって疑問の解消をめざすという意味では、「聞き手に問いかける」という性質を持っているため、ここで記述することにする。

¹ Gijs van der Lubbe : 琉球大学大学院博士後期課程

表 1. 沖永良部語正名方言のさまざまな疑問文の'疑問らしさ'。

	条件①	条件②
肯否疑問	○	○
選択肢疑問	○	○
疑問詞疑問	○	○
確認要求の疑問	×	○
疑いの疑問	○	△
修辭疑問	×	×

1. 肯否疑問

肯否疑問文は、上に述べた疑問文の定義があてはまる典型的な疑問文である。沖永良部語正名方言では、沖縄語首里方言 (Shimoji 2012 : 360) や与論語東区方言 (菊&高橋 2005 : 782-783) と同じように肯否質問と疑問詞質問文のマーキングがことなる。動詞・第1形容詞の第二終止形につく助詞の *nja* か *na* によってマークされる。動詞述語文、または、いわゆる第1形容詞が述語になる形容詞述語文が過去でない肯定文であれば、述語が第2終止形をとり、*-nja* がつく。

- 1) A: ?ura=mu ?ik-i-N=nja?
あなたも行くか?
B: ?ik-i-N=do:
行くよ
- 2) A: ?unu kwa:fi=wa ?ma:sa-N=nja?
そのお菓子はおいしいか?
B: ?iN, ?ma:sa-N
うん, おいしい
- 3) A: ?ari=ga gai-tfu-fi waka-i-Ø=nja?
彼が言っていること分かるか?
B: ?ai, waka-ra-N
いや, 分からない

名詞か、いわゆる第2形容詞が述語になる肯否疑問文のばあい、*na* がつく。

- 4) A: ?ukja kwa-Nkja=mu fimamuni dzo:dzi=na?
あなた方の子どもたちも島言葉が上手か?
B: ?ai, wakja kwa-Nkja=wa fimamuni <zeNzeN> tfikoi-jus-a-N=do:
いや, 私たちの子どもは島の言葉がぜんぜん使えないよ。
- 5) A: ?anu tfu:=wa fima=nu tfu:=na?
あの人は島の人か?
B: ?ana-N
違う (=ではない)。

コピュラの丁寧形 *dero* にも *-nja* ではなく *-na* がつく。

- 6) A: ?adziφu=nu nijisan=wa horodzi dero=na?
哇布の西さんは親戚ですか？
B: ?iN, horodzi =doja:
うん、親戚だよ。

次の図に示したように、沖永良部語正名方言の nja と na の使い分けとほぼ同じ使い分けが、奄美大島であまねく見られる。

表 2. 北琉球語群のさまざまな言語変種における疑問助詞 nja と na の使い分け。

	名詞 (弟か)	動詞非過去形 (降るか)	動詞過去形 (降ったか)	動詞否定形 (降らないか)
沖永良部島正名	?utu:=na?	φuiN=nja	φutti=na	φuradi=na*
奄美大島名瀬	?ututu:=na?	φurjuN=nja	φuti=na φutaN=nja	φuradzi=na φuraN=na
奄美大島湯湾	?ututu:=na?	φujuN=nja	φuti=na	?

*70代後半以下の話者は、φuraN=nja のように否定形の第2終止形に nja も用いるが、70後半以上の話者は、この形式は、間違っている形式という。このことから、比較的、最近できた形式であると考えてよからう。

奄美群島で使われている諸語のなかでは、-mu系と-ri系との2つの終止形が共存する言語が多い。奄美語名瀬方言と湯湾方言には、-mu系と-ri系の終止形の両方がある。Niinaga (2014: 459) は、nja を na の異形態素として分析し、次のように na が-ri系の語尾-i についたときに、共時的におこる音韻同化の結果であると述べている。

-i+na > 口蓋化 /i-nja/ > 鼻音化 > /-n=nja/

通時的におこった音韻変化であるとするれば、沖永良部語における nja と na の使い分けの説明にもなるし、現在、沖永良部語諸方言に-ri系の形式がなくても、かつてはあったという証拠にもなる。なお、沖永良部語国頭方言に次の語形が確認されている(徳永 2014: 10)。用例の音声表記は、本稿で使用するものにあわせた。

- 7) <wadomari>=Ntabe ?atf-u-i=na:?
和泊まで 歩くのか？

この?atf-u-i=na:という形式は、-ri系に由来する-i終止形に na がつき、-N=nja にまで同化していない形のようなものである。国頭方言にこの-i終止形の痕跡が確認されていることからすると、沖永良部語においても-i終止形の使用がつい最近まで普通であったと言えよう。

否定肯否疑問文のばあい、動詞・第1形容詞・コンピュータの否定形に nja がつくことがゆるされるか否かに関しては、話者の意見が一致していない。70代半ばの話者は、否定形に nja の使用を好まないようである。それよりは、否定中止形の-adi²に肯否質問助詞 na をつけたほうが正しいという意識がある。70代前半と60代の話者にとっては、否定形+njaの使用は、違和感がないようである。

² 沖永良部語正名方言の否定中止形の-adi は、日本語の否定中止形のズに相当すると考えられる。

- 8) A: kam-adi=na? ↔ kam-a-N=nja?
食べないか?
B: kam-i-N=do:
食べるよ
- 9) A: jo:fa na:di=na? ↔ jo:fa na-N=nja?
お腹は空いていないのか? (=ひもじくないのか?)
B: jo:fa-N=do:
お腹空いているよ (=ひもじいよ)
- 10) A: kam-i-ʃi=wa na:di=na? ↔ kam-i-ʃi=wa na-N=nja?
食べるのは、ないか?
B: na-N=dja:
ないわ

過去のばあいは、叙述法では、動詞・形容詞・コピュラが-ta-過去形をとるが、過去のことが肯否疑問の対象になるばあいは、-ti 中止形に na がつく。北琉球語群の変種のなかでは、久米島町謝名堂方言 (Van der Lubbe 2012) と国頭村奥方言にも同じ現象がみられる。北琉球語群の変種の中では、与論語 (菊 2007 : 43-44) , 喜界語小野津方言 (白田 2013 : 267) , 奄美語名瀬方言 (上村・須山 1997 : 446) において日本語のテ中止形に相当する形式が過去をあらわすことが確認されているため、現在沖永良部語のばあいに中止形とされる-ti がかつて単独でも過去をあらわしていたと考えられる。

- 11) a. × mifu ho:-ta-n=nja?
b. mifu ho:-ti=na?
味噌を買ったか?
- 12) A: ?ura=wa <aniki>=tu madzini ?ik-adana ?a-tti=na?
あなたは兄貴と一緒にいかなかったか?
B: ?ai, madzini ?i-dza-N=do:
いいえ、一緒に行ったよ。
- 13) A: kinju=nu <tfo:sa>=wa mutʃikaʃa-tti=na?
昨日の調査は難しかったか?
B: ?ai, jasa ?a-tta-ʃiga
いいえ、容易かったけど。
- 14) A: ʃuneda ki-tʃu-ta-nu tʃu:=wa jamatu=nu tʃu: ja-tti=na?
この間来ていた人は、大和の人だったか?
B: ?iN, gaN=do:
うん、そうだよ。

肯否疑問文では、1つの構成素がフォーカス (焦点化) されることもある。フォーカスされる構成素には、フォーカス助詞 du がつく。du で飾られる構成素が疑問の対象になる。

次の用例は、話し手が、誰かが車で畑に行くということを知っているばあいに、行くのが聞き手かどうかを問う文である。

- 15) A: ?ura=ga=du kuruma=fi horo=gatfi ?ik-i-N=nja?
あなたが車で畑に行くのか?
B: ?iN
うん。

次の用例では、話し手は、聞き手が畑に行くということを知っていて、車で行くかどうかを問うている。

- 16) A: ?ura=wa kuruma=fi=du horo=gatfi ?ik-i-N=nja?
あなたは車で畑に行くのか?
B: ?iN
うん。

次の用例では、話し手は、聞き手が車でどこかへ行くということが分かっている、行くのが畑かどうかを問うている。

- 17) A: ?ura=wa kuruma=fi horo=gatfi=du ?ik-i-N=nja?
あなたは車で畑に行くのか?
B: ?iN
うん。

duは、他の品詞・構成素をもフォーカス化させることができる。次の用例では、Aが歩いているBを見て、どこから来たかを問うたところ、Bが島の反対側にある国頭に行ってきたと答える。そこでAが車で行かず、歩いてきたかを聞くために、フォーカスを「歩いて」という副詞節においている。

- 18) A: ?uda=kara ki-ttji=jo?
どこから来た?
B: kuNgjani=gatfi ?i-dzi ki-ttja-figa,
国頭に行ってきたけど、
dari-ta-N=dja
疲れたよ。
A: ?a-ttji=du kuNgjani=gatfi ?i-dzi ki-ttji=na?
歩いて国頭に行ってきたのか?
B: ?ai, kuruma=fi=du ?i-dzi ki-ttja-N=doja:
いや、車で行ってきたよ。

動詞述語文において、その動詞によって表現される運動がフォーカスの対象になるばあいは、duは、動詞の終止形につかず、動詞がいわゆる連用形によって名詞化し、その連用形にduがつき、日本語の「する」に相当するji:muがテンスを担うことになる。

動詞にduがつくのは、取り立てるような重いフォーカスを受けるときだけである。次の用例のIでは、Aは、Bが芋を調理することは知っているが、どのような調理法かが分からなくて、炒めるか他の調理法を使うかを問うているが、IIでは、Aは、Bが芋を調理することを知っていて、芋を煮るのではなく炒めるという調理法を使うかどうかを問うている。IIで話し手が求める回答は、yesかnoだけではなく、なぜそうするかという説明も求めるようである。

- 19) I. A: ?umu=wa ?ikk-i-N=nja?
 芋は炒めるのか？
 B: ?iN, ?ikk-i-N=do:
 うん、炒めるよ
- II. A: wa:ʃi=wa ʃi-ra-N-gane ?umu ?ikki=du ʃi-N=nja?
 煮るんじゃなくて芋を炒めるのか？
 B: ?iN, ?ikk-i-N=do:
 うん、炒めるよ

次の用例では、Aは、Bが立ち上がって何かをしようとしているのを見て、残るのではなく、本当に戻るかどうかを問うている。

- 20) A: mudui=du ʃi-N=nja?
 戻るのか？
 B: ?iN, mudu-i-Ø=do:
 うん、戻るよ

継続相をあらわすシテオル相当形式である-tumu形が述語になる動詞述語文がフォーカスの対象になるばあい、-tumu形の起源としての分析的な形-ti wu:muが見えてくる。-ti中止形にduがつき、有生物の存在動詞wu:muがテンスを担う。

次の用例では、AさんはBさんが芋を調理していることを知っていて、他の調理法ではなく、炒めるという調理法を使っているかどうかを問うている。

- 21) A: ?umu ?i-tʃi=du wu-N=nja?
 芋を炒めているのか？
 B: ?iN ?i-tʃu-N=do:
 うん、炒めているよ。
- 22) A: ?ama=wa nama nibuti=du wu-N=nja?
 お母さんは今眠っているか？
 B: $\text{?ai, na: ?ui-ta-N=do:}$
 いや、もうおきたよ

いわゆる第1形容詞が述語になる形容詞述語文においてもduによるフォーカスがおこなわれる。第1形容詞は、-sa/-ʃa連用形と無生物の存在動詞?a:muからできたものであり、融合形の-samu/-ʃamuで終わることもあるが、沖永良部語正名方言の第1形容詞は、沖縄語首里方言(Shimoji 2012: 365)とことなり、必ずしも融合するわけではない。述語がフォーカスの対象になるばあい融合せず、-sa/-ʃa連用形にduがつき、?a:muがテンスを担うことになる。

次の用例では、Aは、母のお菓子が他の味ではなく、苦いかどうかを問うている。

- 23) A: wakja ?ama=gakwa:ʃi=wa nigjasa=du ?a-N=nja?
 うちの母のお菓子は苦いのか？
 B: $\text{?ai, nigjasa na-N=do:}$
 いいえ、苦くないよ。

次の用例では、Aは、去年の仕事が暇ではなく、忙しかったかどうかを問うている。

- 24) A: $\phi udu \quad \text{ʃigutu}=\text{wa} \quad \text{ʔiʃugaʃa}=\text{du} \quad \text{ʔa-tti}=\text{na}?$
去年仕事は忙しかったのか?
B: $\text{ʔiN}, \quad \text{ʔiʃugaʃa} \quad \text{ʔa-tta-N}=\text{do:}$
うん、忙しかったよ。

名詞述語文の肯否疑問文において述語になる名詞がフォーカスされるばあい、過去形でしか **du** があらわれない。次の用例のとおりである。

次の用例では、Aさんは、Bさんに第三者である「あの人」がオランダの人かどうかを問うている。

- 25) A: $\text{ʔanu} \text{ʃu:}=\text{wa} \quad \langle \text{ʔoraNda} \rangle =\text{nu} \quad \text{ʃu:}=\text{na}?$
あの人はオランダの人なのか?
B: $\text{ʔiN}, \quad \text{gaN}=\text{jo:}$
うん、そうだよ。

次の用例では、Aさんは、Bさんに第三者である「あの人」が昔区長であったかどうかを問うている。

- 26) A: $\text{ʔanu} \text{ʃu:}=\text{wa} \quad \text{mukaʃi} \quad \langle \text{kutʃo:} \rangle =\text{du} \quad \text{ja-tti}=\text{na}?$
あの人は昔区長だったのか?
B: $\text{ʔanaN}, \quad \langle \text{ʃo:ʃo:} \rangle =\text{du} \quad \text{ja-tta-ru}$
いいえ。町長だったんだよ。

肯否疑問マーカ―**na**が機能名詞 **ba:**につくばあいは、形式としては、肯否疑問であるが、話し手が聞き手に **yes/no** という回答を求めるのではなく、その出来事の訳を問う。

次の用例は、BがAの家にアンテナが2つもあることに驚いてその訳を知りたくて問いかける文である。

- 27) A: $\text{wakja} \quad \text{ja:}=\text{ne} \quad \langle \text{ʔaNtena} \rangle \quad \text{ta:ʃi} \quad \text{ʔa:ʃiga}...$
うちの家にアンテナ2つあるけど...
B: $\text{he:}, \quad \text{ta:ʃi} \quad \text{ʔa:-nu} \quad \text{ba:}=\text{na}?$
へー、2つあるわけなの?
A: $\langle \text{gaikoku} \rangle =\text{nu} \quad \langle \text{sakka:} \rangle \quad \text{mi:-nu} \quad \text{me:} \quad \langle \text{hitsujo:} \rangle =\text{dja}$
外国のサッカーを見るために必要なんだよ。

次の用例は、Aが民謡の勉強会に参加したBに夜10時に道で会ったときの会話である。Aは、Bが参加した民謡勉強会が6時に始まることを知っており、10時まで続いたことに驚いて問いかけている。

- 28) A: $\text{nagadu} \quad \text{ʔuto-tu-ta-nu} \quad \text{ba:}=\text{na}?$
長く歌っていたのか?

- B: hju:=wa tʃirage ʔikja-tu-ta-N-tuni
 今日はすごく盛り上がっていたから、
 nama=ntane ʔuto-tu-ta-N=dja
 今まで歌っていたよ。

次の用例では、Aは、Bがテレビを買ってお金がないことに驚き、普段テレビは、さほど高くないはずなのになぜお金がないのか、その訳を知りたくて問いかけている。

- 29) A: numi-ga ʔik-a-dja?
 飲みに行かないか？
 B: mi:sa-nu <terebi> ho:-ti dʒiN=nu na:-mu=djo
 新しいテレビを買ってお金がないな。
 A: <terebi>=wa gaNʃi ta:sa-nu ba:=na?
 テレビはそんなに高いのか？
 B: <soni:>=du ja-tta-ru
 Sony だったんだよ。

2. 選択肢疑問文

選択肢疑問文は、複数の可能性のうちどれが正しいかが話し手にとって不明であるため、聞き手にそれを選択肢として提示する疑問文である。肯否疑問と同じく *nja* か *na* によってマークされるが、*ʔiN* 「はい」、*ʔai* 「いいえ」だけでは回答にならず、選択肢の1つを選んで回答しなければならない。選択肢疑問文においては、2つ以上の選択肢がとりたてられ、助詞 *du* によるフォーカス化がおこる。

次の用例では、AがBに2つの物の中でどちらを使うかを問うている。

- 30) A: ʔuri=du tʃiko-i-Ø=nja? ʔari=du tʃiko-i-Ø=nja?
 それを使うのか？あれを使うのか？
 B: φuri=du tʃiko-i-Ø=do:
 これを使うんだよ。

次の用例では、AがBに徳之島か与論島のどちらへ行くかを問うている。

- 31) A: tukunufima=gatʃi=du ʔik-i-N=nja?
 徳之島に行くのか？
 junnu=gatʃi=du ʔik-i-N=nja?
 与論に行くのか？
 B: junnu=gatʃi=du ʔik-i-ru
 与論に行くんだ。

動詞述語文においては、動作が選択肢疑問のフォーカスになっても、*du* が用いられない。次の用例では、AがBに行くか行かないかを問うている。

- 32) A: ʔik-i-N=nja? ʔik-adi=na?
行くのか？行かないのか？
B: ʔik-a-N=dja
行かないよ。

第1形容詞が述語になる文のばあい、述語が選択肢のフォーカスになれば、duが用いられることもあるが、duの使用は、義務的ではない。次の用例では、AがBに大きいか小さいかを問うている。

- 33) A: ʔubisa-N=nja? ʔiNkusa-N=nja?
大きいか？それとも小さいか？
B: ʔubisa-N=do:
大きいよ。

名詞述語文が選択肢疑問になるばあいは、現在の文なら duがあらわれないが、過去の文なら duがあらわれる。

次の2つの用例は、名詞述語文の選択肢疑問であるが、話題になるのは、過去のことであり、コンピュータの過去形が用いられるため、duがあらわれる。

- 34) A: ʔukja gja:gja=wa jamatu=nu tʃu:=du ja-tti=na?
あなたたちのおじいさんは日本本土の人だったのか？
naʔa=nu tʃu:=du ja-tti=na?
沖縄の人だったのか？
B: naʔa=nu tʃu:=du ja-tta-ʃiga,
沖縄の人だったんだけど、
ʔma:=nu ʃima=nu muni=mu dʒo:dʒi ja-tta-N
ここの島の言葉も上手だった。

次の用例では、話題になるのが過去のことでないため、duがあらわれない。弟のAが兄のBに問う文である。

- 35) A: ʔuri=wa wa: muN=na? jaku=ga muN=na?
これは私のものなのか？お兄さんのものなのか？
B: ʔura=ga muN ʔanadi=na?
あなたのものじゃないか？

3. 疑問詞疑問文

疑問詞疑問文は、その命題の中に話し手にとって不明な情報が含まれており、その不明な情報を疑問詞であらわす文である。疑問詞疑問文は、終助詞joによってマークされる。動詞・第1形容詞の第2終止形に疑問詞質問助詞joがつく。

- 36) A: nu: ʃu-N=jo?
何をしているか？

B: <ʃo:do> ʔifaja=gatʃi ʔik-i-nu ni: ja-tta-ʃiga
 ちょうど病院に行くところだったけど…

37) A: kwa:ʃi=wa ta:tʃi ʔa:-ʃiga ʔuduru=ga ʔma:sa-N=jo?
 お菓子は2つあるが、どちらがおいしい?

B: ʔuri=du ʔma:sa-ru =ja:
 こちらのほうがおいしいね。

第2形容詞には、コピュラなしでjoが直接述語につく。

38) A: taru=ga dʒo:dʒi=jo?
 だれが上手か?

B: dʒiro:=ga=du dʒo:dʒi =do:
 次郎が上手だよ。

名詞述語文が疑問詞質問文になるばあいには、joが直接述語になる名詞につく。

39) A: kuNgjanimuni=wa ʔikjaNnjanu muni =jo?
 国頭の言葉はどのような言葉か?

B: kuNgjanimuni=wa ʔma:=nu muni=tu
 国頭の言葉はこの言葉と
 φuʃi=nu tʃigo-ti
 イントネーションが違って
 midirafa-nu muni =do:
 面白い言葉だよ。

過去のばあいは、動詞・第1形容詞・コピュラの-ti中止形にjoがつく。

40) A: warabi ja-tta-ini=wa nu:=nu ʃigutu=nu
 子どもだったころは何の仕事が

ʔitʃibaN samatʃasa ʔa-tti=jo?
 一番面倒くさかったのか?

B: ʔubi-tu-ra-N
 覚えていない。

正名方言の疑問詞は、nu: (なに) , taru (だれ) , ʔuda:() (どこ) , ʔikjassa (いくら) , Nga/niga (なぜ) , ʔikja:() (どう) , ʔitʃi (いつ) , ʔikutai (何人) , ʔuduru (どれ・どの) , ʔikjaNnjanu (どのような) などがある。

nu:は、日本語の「何」にあたり、もっとも基本的な機能は、物をあらわす名詞に対する疑問詞である。次の用例では、妻のAが夫のBに何を飲んでいるかを問うている。

41) A: nu: nu-du-N=jo?
 何を飲んでいるのか?

B: midi=du nu-du-N =do:. saki ʔana-N =do:
 水を飲んでいるんだよ。酒じゃないよ。

nu:が出来事をあらわすばあいもある。次の用例では、A が B に家にいなくて何があったかを問い、nu:「なに」が出来事をあらわしている。

- 42) A: kinju ?ukja ja:=gatʃi ?i-dʒa-tu
昨日、あなた方の家に行ったら
taru=mu wu-radana ?a-tta-ʃiga
誰もいなかったけど
nu:=nu ?a-tti=jo?
何があったのか？
B: dʒikkjo=gatʃi ?i-dʒu-ta-N
瀬利覚に行っていた。

nu:が単語の構成要素になることもある。たとえば、nu:ja:は、時刻をあらわす疑問詞である。

- 43) A: taro:=wa nu:ja:=be: ki-N=jo?
太郎は何時ごろ来る？
B: dʒu:dʒi=be: ki:=mu=di
10時ごろに来るそうだ。

複数の要素から何を選ぶかをたずねるのには、?uduruを用いる。

- 44) A: ?irabumuni=tu naɸamuni ?uduru=ga mutʃikafa-N=jo?
沖永良部語と沖縄語、どちらが難しいか？
B: ?irabumuni=ga=du mutʃikafa-ru
沖永良部語のほうが難しい。

名詞の前につくばあい、?uduruは、日本語の「どの」の意味になる。

- 45) A: ?uduru ʃima=nu muni=nu ?itʃibaN mutʃikafa-N=jo?
どの島の言葉が一番難しいのか？
B: masana=nu muni=dja
正名の言葉だよ。

taru「だれ」は、人のことをたずねるのに用いる。

- 46) A: ?a:ni=gatʃi=wa taru=tu ?ik-i-N=jo?
赤嶺には誰と行くのか？
B: ?aja=tu=du ?agufi ?ik-i-N=doja:
おねえさんと一緒に行くよ。

?itʃi「いつ」は、時をたずねるのに用いる。

- 47) A: <?erabu>=gatfi=wa ?itfi ki-ttji=jo?
 沖永良部にはいつ来たのか?
 B: kinju=du ki-ttja-ru
 昨日来たんだ。

場所をたずねるには, ?uda 「どこ」を用いる。

- 48) A: ?uda=kara ?mo:-tji=jo?
 どこからいらっしゃいましたか?
 B: horo=kara=du ki-ttja-N=dja
 畑から来たんだよ。

理由や原因をたずねるには, ?ikjafi 「どうして」やNga 「なぜ」, または, niga 「なぜ」を用いる。

- 49) A: Nga jima=gatfi mudui-bufa na-N=jo?
 なぜ島に戻りたくないのか?
 B: <tokai>=neti kuraji-bufa-N-tu=du
 都会で暮らしたいから
 mudui-bufa na-N=dja
 戻りたくないんだよ。

手段をたずねるにも?ikjafi 「どうやって」を用いる。

- 50) A: nafemuni=wa ?ikjafi ?ubi-jabu-ti=jo?
 奄美語はどうやって覚えましたか?
 B: wa=ga nafe=ne wu-tta-nu tuki=wa
 私が奄美大島にいたときは,
 nafe=mu mu:ru <ho:geN>=du ja-tta-N-tuni
 奄美大島も全部方言だったから
 tada ?agu=tu hana?i ji:gatfana ?ubi-ta-N
 ただ友達と話しながら覚えた。

様態をたずねるのには, ?ikja(:) 「どう」を用いる。

- 51) A: <ke:ro:kai>=wa ?ikja: ja-tti=jo?
 敬老会はどうだったのか?
 B: midira?a ?a-tta-N=doja:
 面白かったよ。

疑問詞が重複形をとるばあいもある。これは、複数をあらわすと考えられるが、調査が不十分であるため、今後の課題にしたい。

- 52) A: *tatta=ga ki-ttʃu-ti=jo?*
だれだれが来ていたのか？
B: *taro:=tu dʒiro:=tu <jakuba>=nu tʃu: mu:ru ki-ttʃu-ta-N=do:*
太郎と次郎と役場の人、皆来ていたよ。

疑問詞があらわす、欠けている情報がいくつかの選択肢を取り得るばあいは、疑問詞、または、疑問詞が作る句にフォーカス助詞 *du* がつく。たとえば、次の用例では、Aは、ビデオをとったのは、敬老会を手伝った人であることを知っており、その限られた人数の中の誰であったかを問うために、疑問詞が作る句に *du* がついている。

- 53) A: *<ke:ro:kai>=nu <bideo> muroi-buʃa-ʃiʒa,*
敬老会のビデオを見たいけど、
ta:=ga=du tu-tti=jo?
誰がとった？
B: *taro:=ga=du tu-tta-N=dʒa*
太郎がとったよ。

次の用例では、AがBに多くの飲み物の中から1つを選ばせようとして問いかけている。

- 54) A: *<bi:ru>, <ʃo:tʃu>, <nihonʃu>, <uisuki>=nu ?a:-ʃiʒa*
豚肉、チキン、ハンバーグがあるけど、
nu:=du num-i-N=jo?
何を食べるか？
B: *wana: <bi:ru>*
私はビール。

次の用例では、AがBに太郎と次郎という2人からなる選択肢からどちらのほうが上手かと問うている。

- 55) A: *taro:=tu dʒiro:, taru=du dʒo:dʒi=jo:?*
太郎と次郎、誰のほうが上手か？
B: *dʒiro:=ga=du ho:ri dʒo:dʒi=dʒa*
次郎のほうがずっと上手だよ。

4. 確認要求の疑問

確認要求の疑問は、話し手に何らかの判断が成立しているということを前提として、聞き手にその判断を問いかけ、確認を求めるといった機能を持っているものである（日本語記述文法研究会 2003 : 38）。沖永良部語正名方言の確認要求の疑問文をあらわす主要な形式は、*sa* と *-raja:* と *do:* と *?anadina* である。

sa は、動詞・形容詞の第2終止形につく。話し手の意志、意見、評価を伝える終助詞 sa と似ているが、確認要求のマーカースa は、名詞述語文と第2形容詞が述語になる文において直接述語につくのに対し、終助詞 sa は、コンピュータにつく。

56) ʔanu tʃu:=wa ʔutu=sa?
 あの人は弟だろう？

57) ʔanu tʃu:=wa ʔutu: ja-N=sa
 あの人は弟さ。

疑問助詞 sa による文は、イントネーションも終助詞 sa による文とことなる。次の図のとおりである。

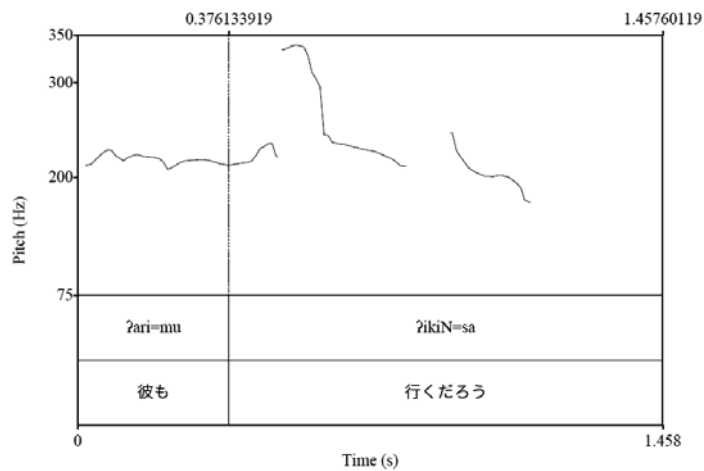


図 1. 疑問助詞 sa による文のイントネーション。ʔari=mu ʔikiN=sa? 「彼も行くだろう？」

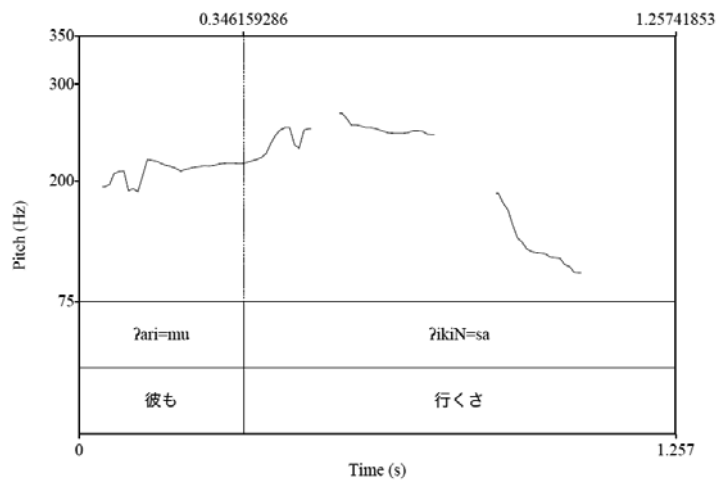


図 2. 話し手の評価をあらわす終助詞 sa による文のイントネーション

上の図にしめしたように、疑問助詞の sa がつくばあいは、ʔikiN の語頭に山があり、それから音調がさがり、sa のところでまた少しあがってからさがる。

saによる疑問文は、yes/noで答えることができる肯否疑問であるが、話し手は、聞き手が肯定的に答えることを予想して問いかけている。ニュアンス的に日本語の「だろう?」と似ている。八重山語石垣方言に非常に似ているsaのもちい方がある(宮良信詳1995:62)。

次の用例では、Aは、Bが明日も家にいるだろうと考えているため、saによる確認要求の疑問文でBに問いかけている。Aには、何らかの根拠があってBが家にいるだろうと考えた上での問いかけである。Bが家にいるかどうか分からないばあいは、saの使用が不自然であり、肯否質問助詞njaによる質問が正しいとされる。

- 58) A: ?ui=wa na:tfa=mu ja:=ne ?meN=sa?
あなた様は明日も家にいらっしゃるでしょう?
B: ?iN, wu-N=do:
うん、いるよ。

次の用例では、Aは、Aの提案でBもよいだろうと思っているが、確認として問いかけている。

- 59) A: ?uri=fi jukkwa-N=sa?
それでいいだろう?
B: jukkwa-N=do:
いいよ

過去のことを尋ねるばあいは、-ti中止形ではなく、-ta-過去形の第2終止形につく。次の用例では、Aさんは、Bさんが元気にしていたことを想定し、その確認を求めて問いかけている。話者の内省によると、聞き手の様子が元気そうでないばあいは、次のようなsaの使用が失礼に当たるそうである。

- 60) A: dukusa fu:-jabu-ta-N=sa?
元気にしていたでしょうか?
B: ?iN, dukusa ?a-tta-N=do:
うん、元気だったよ。

否定形のばあいも直接第2終止形につく。次の用例では、Aは、Bが大丈夫であることを予想し、その確認を求めて問いかけている。話者によれば、聞き手が大丈夫そうでないばあいは、saを使うと違和感があるという。

- 61) A: ?ikja:=mu na-N=sa?
大丈夫だろう?(どうもないだろう?)
B: ?iN, ?ikja:=mu na-N
うん、大丈夫だ。

次の用例では、Bは、Aと一緒にいく「友達」がカノジョであると予想し、本当にそうかどうかの確認をとっている。

- 62) A: ?agu=tu madzini <guamu>=gatfi
友達と一緒にグアムへ

?ik-i-N-koi na-tta-mu=djo

行くことになったよ。

B: ?agu=di ?i:-fi=wa <kanodʒo>=sa?

友達というのは彼女だろう？

A: gaN=dja

そうだよ。

次の用例は、Bが以前にその翌日にも時間あるから調査しても良いということをAに話したことがあって、Aが確認として改めてBに問うている場面である。以前に話したことがないばあいには、saによる問いが押しつけがましいとされ、nja/naによる聞き方のほうがふさわしいという。

63) A: jukkwa-rja na:tfa=mu fimamuni

良かったら、明日も島言葉を

naro-tfi muroi-buja ?a-jabu-fi-ga

教えてもらいたいですが、

na:tfa <ɕjikaN> ?a-jabu-N=sa?

明日、時間ありますか？

B: ?iN, jukkwa-N=doja:

うん、いいよ。

次の用例では、Aは、Bが冬瓜を盗んだと思い、とがめるように確認をとっている。犯人がBであるという根拠がなければ、このような言い方は、しない。

64) A: wa=ga ho:-ta-nu fubui tu-tta-fi=wa ?ura=sa?

私が買った冬瓜をとったのは、あなただろう？

B: ?ana-N, ?ana-N!

違う、違う！

次の用例は、以下のような場面である。Aは、Bの弟が日本本土にいることを知っているが、どこにいるのか知らないので、鹿児島にいるのかを問うたところ、Bは、否定的に回答した。そこで、Aは、少々混乱してBに、弟がいるのは日本本土かと確認したところ、Bは、弟が神戸にいると応えた。

65) A: ?ukja ?utu=wa jamatu=ne...

あなたたちの弟は、日本本土に...

<kagojima>=ne=du wu-N=nja?

鹿児島にいるのか？

B: ?ai...

いや...

A: ?e? jamatu=sa?

え？日本本土だろう？

B: ?iN, <ko:be>

うん、神戸。

確認要求に用いられる接辞-raは、フォーカス助詞 ga と共起すると、疑いをあらわす。確認要求のばあいは、フォーカス助詞 ga があられず、終助詞 ja: がかならずつく。-raja: による確認要求の疑問は、聞き手が当然、認めるだろうと考えられることを確認する言い方である。

動詞・第1形容詞につく接辞-raは、かつては、推量をあらわす形態素であったと考えられる。かりまた・島袋(2007:6)では、沖縄語諸方言の-ra形を「推量の形」とよぶ。かりまた・島袋は、日本語の「だろう」を述語に持つ文が「おしはかり」から「念おし」(=確認要求)へと移行する過程が、沖縄語今帰仁村謝名方言で用いられる「念おしたずね形」-ra形と「kuse:推量形」-ra形に相関関係があることを指摘している。沖永良部語正名方言には、kuse:推量形³が存在しないが、-raja:確認要求形と疑いをあらわす-ga...-ra構造に同じ-ra形が用いられていることから、-ra形の本来の意味は、推量であったと充分考えられる。

話者の内省によれば、-raja:の使用は、sa とほとんど同じであるが、sa よりも話し手の考えを押し付けようとする機能が強く感じられる。そのため、-raja:は、-sa よりぞんざいな言い方とされて使用されにくくなってきており、sa のほうが使用される。80代以下の話者では、-raja:の使用がほとんど衰退しており、聞いたこともない話者もいる。

次の用例では、Aは、Bが当然、パンを食べると予想し、その確認をとるために問うている。

- 66) A: ?ura=wa <paN> kam-i-ra =ja:?
あなたはパンを食べるだろう?
B: ?iN, kam-i-N =do:
うん、食べるよ。

次の用例は、AがBには当然、時間があると思って問いかける場面である。時間があるという根拠がなければ、-raja:は、用いられない。

- 67) A: na:tja <djikaN> ?a:-ra =ja:?
明日時間あるよね?
B: ?iN
うん。

次の用例は、夫婦同士の会話である。夫のAは、当然、食べてよいと思って妻のBに問いかける。このようなばあいには、聞き手が目下でない、-raja:が使えない。

- 68) A: ?ama, wanu=mu ka-di jim-i-ra =ja:?
お母さん(妻のこと)、俺も食べていいよな?
B: ?uda:da kami =jo:
どうぞ食べてよ。

上にも述べたが、述語が-raをとる文においてgaがフォーカス助詞として用いられるばあいは、確認要求というより疑いという意味になるが、-raja:による確認要求の疑問文にフォーカス化がおこるば

³ 今帰仁村謝名方言のkuse:推量形においては、推量のフォーカスとなる構成素がフォーカス助詞kuse:によってマークされ、述語が-ra形をとる、「おしはかり」をあらわす構造である。例: kinu:=kuse: nuda:ra「昨日飲んだんだらう(飲んだのは昨日だらう)」(用例は、かりまた・島袋2007から)

あいはい、フォーカス助詞として *du* が用いられる。次の用例は、息子の A が大切にしてきた日本酒がなくなったことに気づき、父親の B の顔が赤いのを見た上での会話である。

- 69) A: $\text{?atfa=ga=du wa: saki nu-da-ra=ja:?!}$
 お父さんがおれの酒を飲んだらう？！
 B: $\text{?abe! ?ura saki=du ja-tti=na?}$
 あらまー！お前の酒だったのか？

終助詞 *do:* は、基本的に話し手の推量をあらわすが、対話的な用法の 1 つとして話し手の推量を聞き手に確認する用法でも用いられる。*do:* は、動詞と第 1 形容詞の第 2 終止形につくが、名詞述語文と第 2 形容詞が述語になる文においては、直接名詞か第 2 形容詞につく。

- 70) $\text{?ari=wa \phi uneda=mu ki-ttfu-ta-N=do:?}$
 彼は此間も来ていたらう？
 71) $\text{hju:=wa ?u\phi utfikanu=neti fi:mu jukkwa-N=do:?}$
 今日は大津勘でやってもいいだらう？
 72) $\text{?aNta kwaNkja=mu wudui=nu dzo:dzi=do:?}$
 彼らの子どもたちも踊りが上手だらう？

確認要求に用いられる *do:* と終助詞 *do:* との違いは、イントネーションである。前者は、下降イントネーションで発音されるが、後者は、平坦なイントネーションで発音される。次の図にしめしたように、推量助詞 *do:* のばあいは、 ?idzaN 「行った」の語頭に高い山がある。

- 73) ?i-dza-N=do:?
 行っただらう？

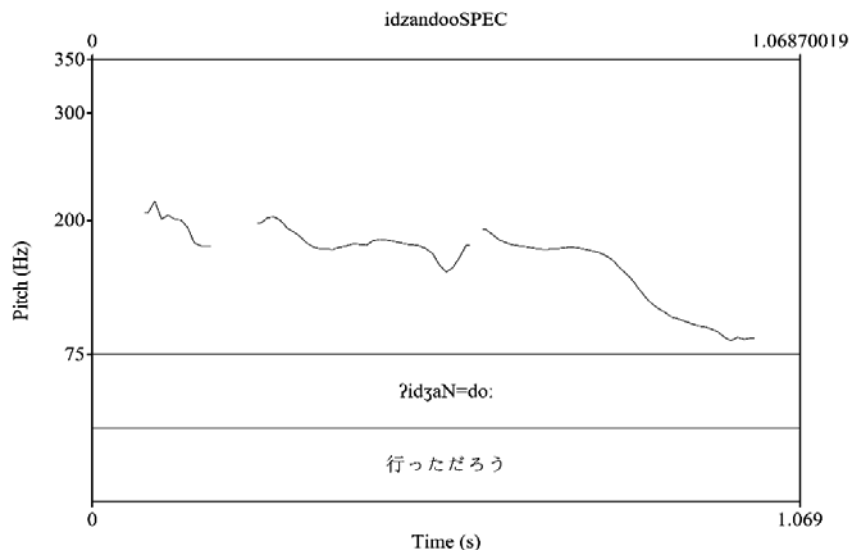


図 3. 推量助詞 *do:* による文のイントネーション

- 74) ʔi-dʒa-N=do:
行ったよ。

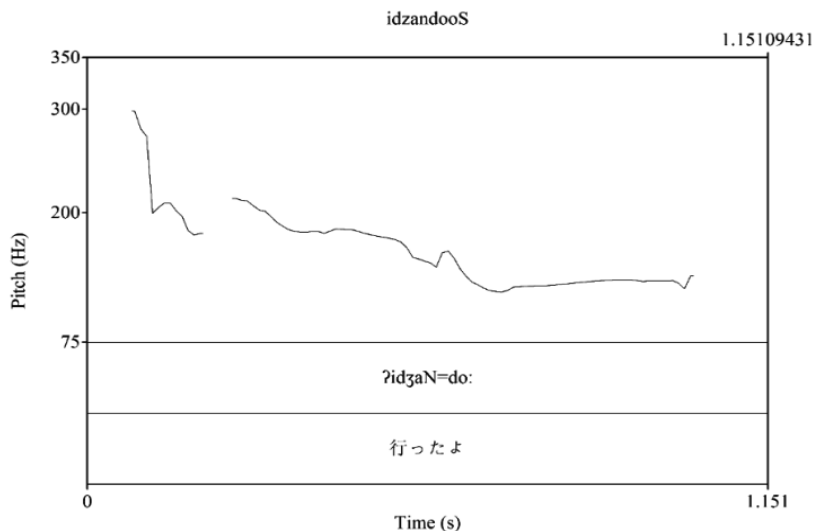


図 4. 終助詞 do:による文のイントネーション

do:が後述した sa と-raja:と決定的にことなる点は、話し手の認識の不確かさである。それは、do:の確認要求の用法が、話し手が既知の事柄をもとにして未知のことについて見当をつける推量の do:から、派生したためである。

次の用例では、Aが太郎のおじいさんの話をしている。おじいさんがしばらく体調をくずしていたが、そのことを知っているBがおじいさんがまた元気になったかと聞き、Aがそれを肯定する。Bは、おじいさんがまた元気になったため、今も仕事に行っていると推量し、それをAに確認している。

- 75) A: taro:=ga gja:ga=ga
太郎のおじいさんが
<ke.ro:kai>=neti hanaʃi ʃa-N
敬老会で話しをした。
- B: gaN=na? mata <geNki>=ni na-tti=na?
そうか？また元気になったの？
- A: ʔiN
うん。
- B: nama=mu ʃigutu ʔi-dʒu-N=do?
今も仕事に行っているだろう？
- A: ʔiN. <daigeNki>=do:
うん。大元気だよ。

do:の確認用法に属するもう1つの用法として次の用例にあるような「聞き手への配慮」がある。Aは、Bが妻の父親が区長をしているのを知らないと推量し、do:による疑問文でその確認をとっている。このようなばあいには、saか-raja:を用いれば、話し手の判断が成り立っており、認識が確かであるとい

うニュアンスが入るため、話し手の判断を聞き手に押し付けるような強い言い方になる。do:を用いれば、話し手の認識が不確かであることで、聞き手に対する‘押し付けがましき’がなくなる。

- 76) A: tudzi=nu ?uja=nu ja:=gatji ?i-dzi...
妻の親の家に行って…
- B: gaN=na? ?uja nama dukusa ji: ?me-N=nja?
そうなの？親，今元気にしていらっしゃるか？
- A: ?iN. nama <kutfo:> fu-N=dja
うん。今区長をやっている。
- B: ?e:? ?atja=na?
え？お父さん？
- A: ?iN. ?atena-N=do:?
うん。知らないだろう？
- B: ?atena-N
知らない。

もう1つの確認要求の疑問として用いられる形式は、日本語の「ではないか」に相当する?anadinaである。これは、コピュラの否定形?anamu「でない」の-di否定中止形-diに肯否疑問助詞naがついた形である。確認要求の使用において?anadiとnaが?anadjaのように融合することが多い。

?anadinaは、テンスとアスペクトに関係なく、動詞・第1形容詞の第1終止形につく。名詞か第2形容詞が述語になる文のばあいは、非過去形では、その述語になる名詞か第2形容詞に直接つくが、過去形では、コピュラの過去形の第1終止形jattamuにつく。

- 77) mudu-ra-mu ?ana-di=na?
もどらないんじゃないか？
- 78) mudu-tu-mu ?ana-di=na?
もどっているんじゃないか？
- 79) mutjikaŋa-mu ?ana-di=na?
難しいんじゃないか？
- 80) mutjikaŋa ?a-tta-mu ?ana-di=na?
難しかったんじゃないか？
- 81) dzo:dzi ?ana-di=na?
上手じゃないか？
- 82) dzo:dzi ja-tta-mu ?ana-di=na?
上手だったんじゃないか？
- 83) naŋatfu ?ana-di=na?
沖縄の人じゃないか？
- 84) naŋatfu ja-tta-mu ?ana-di=na?
沖縄の人だったんじゃないか？

?anadina の用法は、大きく2つにわけることができる。①話し手と聞き手が両者知っていることや一般的な知識、伝聞に基づく知識を話の話題にしたり、または、聞き手が忘れていることを思い出させたりする用法と、②話し手が聞き手の知っているはずのことを聞き手に気づかせる用法がある。

次の用例は、用法①の用例である。Aは、Bがこの間沖永良部に来ていたことを知って、それを話の話題としてあげようとしている。

- 85) A: ?ura=wa φuneda=mu jima=gatʃi
あなたがこないだも島に
ki-tʃu-ta-mu ?ana-dja?
来ていたんじゃないか？
B: gaN, gaN
そう、そう。
A: <jomehaN>=ga ?uja ?oi-ga=du ki-tʃi=na?
お嫁さんの両親に会いに来たのか？

次の用例も用法①の例である。AがBに道を聞いて、Bが公民館を目印にして説明しようとしている。Aも公民館の場所が分かるかどうかを確認している。

- 86) A: taro:=ga ja:=gatʃi φu:=di gaj-a-tta-ʃiga,
太郎の家に来いと言われたけど、
taro:=ga ja:=wa ?uda =jo?
太郎の家はどこなのか？
B: ?uri=wa =jo:, ?ama=ne <ko.miNkaN>=nu
それわね、あそこに公民館が
?a:-mu ?ana-di=na?
あるんじゃないか？
A: ?i:
うん。
B: ?unu <sugu> ?uʃu=dja
そのすぐ後ろだよ。

次の用例は、用法②の例である。AがBに怒って、車を洗うように何回も言ったことをBも知っているはずなのにBに気づかせようとしている。

- 87) A: ?ura Nga <kuruma> ?aro-ra-no:?!
あなたなぜ車を洗わないのか？
?ikukoi=mu ?aro-ri=di gai-tʃa-mu ?ana-dja?!
何回も洗えと言ったじゃないか？！
B: haNmaraja!
うるさい！

5. 疑いの疑問文

疑いの疑問文は、話し手にとっては、不明な情報があるということだけをあらわすものであり、聞き手に問いかける機能をもたない（日本語記述文法研究会 2003：35）。疑いの疑問文には、独話的な用法と対話的な用法がある。疑いの疑問文は、本来的には、聞き手へ問いかける機能をもたないため、独話的な用法が基本であり、対話的な用法が派生的である。宮崎 et al. (2002) によると、独話的な用法は、「[疑いの疑問文の] 基本的性質から、〈疑い〉の文は聞き手に対する伝達性を含まず、聞き手が存在しない状況や心内発話のような独話的な環境で使われるのが一般的であると考えられる」とのことである。このような用法としては、〈判断不明〉、〈思考過程〉、〈疑念〉の3つがある。

〈判断不明〉というのは、その命題が本当か否かや、選択、または、補充すべき値に対して、話し手がまったく見当がつかないということを示すものである。〈思考過程〉というのは、判断を形成することができないという点は、〈判断不明〉と似ているが、話し手が判断形成へ向けてありうる可能性を検討して努力していることをあらわす疑いの文である。〈疑念〉というのは、話し手がその命題が成り立つことを否定的に思うこと、あるいは不信に思うことをあらわすものである。

上に述べたように、疑いの疑問は、疑問の機能を成り立たせる2つの特徴のうち、その命題の判断が成り立たないという特徴のみをもつ。つまり、疑いの疑問の特徴は、聞き手に対して問いかける機能をもたず、判断が成り立たないまま文として発話することであるため、独話的な機能が基本である。しかし、独話や心内発話という環境のみで用いられるわけではなく、対話的な機能もある。対話的な用法としては、疑いの疑問文の独話的な性質を利用して、聞き手に応答を強制しない、聞き手が答えを知っているかどうか分からない状況に用いられる質問である。そのような機能については、下に疑いの疑問のさまざまな形式を記述しているところで改めて言及する。

沖永良部語正名方言の疑いの疑問文をあらわすマーカーが3つある。

- ① kaja:
- ② 疑問詞+...-ru
- ③ ga+...-ra
- ④ gara

kaja:の由来は、疑問のマーカーkaに終助詞のja:がついたものであると考えられる。kaだけでは、疑問文にならないが、同じ北琉球語群に属している沖縄島国頭村奥の方言では、kaが疑いの疑問のマーカーとして存在するため⁴、かつて沖永良部語にも疑問のマーカーkaがあったことは、充分考えられる。ただし、日本語の疑問文のマーカーkaが借用されたとも考えられる。次の用例に示すように現在沖永良部語正名方言のkaja:には、さらにja:を後接することができるということから共時的には、kaja:を1つの疑問のマーカーとして分析して良いことが分かる。

- 88) A: saNjiru hadzimeti naro-ta-nu tuki=wa ?ikutfi jabu-ti=jo?
三味線をはじめて習ったときは何才でしたか?

⁴ 沖縄島国頭村奥の方言の?aN=ja ?ijaN=ka? 「そうは言わないのだろうか」では、kaは、話し手に判断が成り立たないということを示す。

B: ʔikutʃi=be: =kaja:=ja:ʔ
何才ぐらいかな？

kaja:にマークされる文にフォーカス化がおこるばあい、平山輝男（1986：893）は、沖永良部瀬利覚の方言では、疑いの疑問文のフォーカスマーカーgaも用いられると報告しているが、沖永良部語正名方言では、gaは、kaja:と共起せず、duが用いられる。

89) na:tʃa ʔagu=nu ki:-ʃiga, du:tʃui=ʃi=du ki-N=kaja:ʔ
明日、友達が来るけど、独りで来るのかな？

kaja:は、すべての品詞につく。動詞・第1形容詞につくばあい、第2終止形にも、旧連体形にもつく。第2終止形につくか旧連体形につくかによって意味は、かわらないが、旧連体形につくばあいは、疑いのみならず、話し手の意志の未決定をあらわすことが多い。この用法は、「意志の疑問文」に属する。

kaja:にマークされる疑いの疑問文には、判断不明、思考過程、疑念という独話的な用法もあれば、聞き手に応答を強制しない、聞き手が答えを知っているかどうか分かんなくても問いかけてみる用法もある。

判断不明の用法は、話し手がその命題が本当かどうか分からないことや、情報が欠けているため、判断がつかないことを表明する。判断不明の疑いの疑問文には、疑問詞がよくあらわれる。次の用例は、判断不明の用法としての疑いの疑問文の使用を示す。

90) ʔaja=wa nama ki-tʃu-ra-N =ja:. ʔikja ʃa-N=kaja:ʔ
姉はまだ来ていないね。どうしたのかな？

91) <taro:>=wa ʃiNse=tu <puratoN>=ga <tetsugaku>nu
太郎は先生とプラトンの哲学の
hanafi ʃu:-ta-ʃiga,
話をしていたけど
ʃima ʔidzi-ta-nu kutu=nu na:-nu tʃu:
島を出たことのない人
ʔikjaʃi gaNnjanu kutu atea-N =kaja:ʔ
どうしてそんなことを知っているんだろう？

92) ʔuda=mu φui=mu mi-tʃa-ʃiga,
どこもかも見たけど、
wa: hama=wa ʔuda=ne ʔa-N =kaja:ʔ
私の鎌はどこにあるんだろう？

思考過程の用法は、疑問の解消に向けてありうる可能性を検討していることをあらわすものである（日本語記述文法研究会 2003：36）。

93) wudza=wa ja:=ne wu-ra-N =ja:. hatte=gatʃi=du ʔmo:-tʃu-N =kaja:ʔ

おじさんは家にいないね。畑にいらしているのかな？

- 94) ?ari=wa jima=nu tʃu: ?ana-N. naje=nu tʃu: =kaja:?
 彼は島（＝沖永良部）の人ではない。名瀬（＝奄美大島）の人かな？

kaja:には、疑念の用法もある。疑念というのは、実際にどうなのかが分からないが、その命題に対してありのままや言われたまを不審に思うことをあらわす。

- 95) ?ami=nu ɸu-i-mu =di gai-tʃu-ta-ʃiga, ?ami ɸu-i-Ø =kaja:?
 雨が降ると言っていたけど、雨、降るのかな？

kaja:は、独話的な用法が基本でありながら、対話的な用法もある。疑いの疑問文の独話的な用法は、その命題に対して判断が未成立であるが、聞き手に問いかけないのに対し、対話的な用法は、その命題に対して判断が未成立であり、聞き手に問いかけるため、疑問文たらしめる2つの特徴を両方もつということになる。日本語標準語でその2つの特徴をもっても、疑いの疑問文をあらわす形式を用いるのは、宮崎 et al. (2002 : 188) がいう〈応答を強制しない質問〉と〈聞き手への配慮を表す質問〉という用法の2つである。

通常の疑問文は、聞き手が話し手の疑問に答えることができると想定し、問いかけることによって応答を強制する機能をもっているのに対し、〈応答を強制しない質問〉の疑いの疑問文による質問においては、聞き手が話し手の疑問に答えることができるという想定が成り立たないことが応答を強制しない機能を可能にする。

次の用例は、kaja:による〈応答を強制しない質問〉の用法を示す。質問の対象となる田皆の区長が第三者であるため、新年会に来るかどうかは、Bが知っているという想定がAに成り立たちにくいため、njaよりkaja:が用いられる。

- 96) A: <ʃiNneNkai>=gatʃi=wa tanja=nu <kutʃo:saN>=mu ki-N=kaja:?
 新年会には田皆の区長さんも来るかな？
 B: tabuN ki:-mu =di ?umi-N =do:
 たぶん来ると思うよ。

宮崎 et al. (2002 : 188) のもう1つの疑いの疑問文の対話的な用法の〈聞き手への配慮を表す質問〉は、正名方言にない。

旧連体形+kaja:の使用範囲は、第2終止形+kaja:のそれに重なっているが、前者は、話し手が自分の行為に迷っているニュアンスで用いられることが多い。

- 97) ?itʃi muduru =kaja:?
 いつ戻ろうかな？
 98) <ke:ki> tʃukuru =kaja:?
 ケーキを作ろうかな？

旧連体形+kaja:に人称制限があるわけではない。疑いの疑問文の独和的な用法の中で〈疑念〉という用法に偏りがあるようである。

- 99) kjaku=nu ki-N-tu, <ke:ki> tʃuku-ti ʔa:-ʃiga,
客が来るから、ケーキを作っているけど、
ʔuri=gassa=ʃi jukkwaru=kaja:ʔ
それだけで良いのかな？
- 100) hju: ʔami=nu φu-i-mu=di gai-tʃu-ta-ʃiga,
今日雨が降ると言っていたけど、
kumu=mu na:di, ʔami φuru=kaja:ʔ
雲はないし、雨降るかな？
- 101) A: <peN> ʔa-N=nja?
ペンあるか？
B: ʔaru=kaja:ʔ ʔa-tta-ʃiga hakk-ar-a-N-koi na-tta-N-tu
あるのかな？あったけど、書けなくなったから、
φuneda φunagi-ti ʃimo-ta-ʃiga...
この間捨ててしまったけど...

疑いの疑問文の対話的な用法である〈聞き手に応答を強制しない質問〉においては、旧連体形＋kaja:がほとんど用いられない。

疑問詞が動詞の-ru強調形と共起するばあい、当惑して自分がどのような行為をとれば良いか分からないニュアンスで用いられる。人称は、1人称に制限され、疑問詞疑問文にしか用いられず、判断不明という独話的な用法でしか用いられない。終助詞の djo:と jo:とよく共起する。

- 102) <φusaku> na-tti kam-i-ʃi=ga na-N-koi na-tta-mu=djo:!
不作になって食べるのがなくなったな！
nu: kam-i-ru=djo:?!
何を食べるのか？！
- 103) ja:=mu jakk-a-tti, ʃima=kara=mu ʔidʒi-rar-adi...
家も焼かれて、島からも出られないし...
ʔuda=gatʃi ʔik-i-ru=djo:?!
どこに行くのか？！

特記すべき点としては、沖永良部島で決まり文句として広く知られている ʔikja=ga ʃi-ru=djo:! 「どうしよう！」がある。

- 104) ʔikkjadjo: ʔikja=ga ʃi-ru=djo:?!
きゃーっ！どうしようかな？！

これには、フォーカス助詞 ga が疑問詞につき、-ru強調形と共起する。奄美語名瀬方言（三石 1993 : 129）と奄美語湯湾方言（Niinaga 2014 : 511）においても、フォーカス助詞 ga と-ru強調形が共起する構造が生産的におこるが、疑問詞質問として用いられる。それに対して、現在沖永良部語諸方言においては、このような構造は、判断不明や当惑をあらわす疑いの疑問として用いられる。

- 105) ?uda=gatfi=ga ?ik-i-ru=djo:?!
 どこに行こうかな？！

疑問詞と-ru形が共起する疑いの疑問文において疑問詞にフォーカス助詞 du がつくばあいもある。疑問詞にフォーカス助詞 ga がつくばあいと、何もつかないばあいの違いは、du がつくばあいは、いくつかの選択肢があるがどれにするかに迷うというニュアンスで用いられることである。

次の用例では、A と B が踊りの練習の場所を決めようとする。選択肢としては、正名の公民館と知名町の劇場である『あしびの里』という2つがあるが、公民館が暑すぎることとあしびの里が高いことでどちらにするかが困難である。

- 106) A: wudui=nu <reNfu:>=wa ?uda=neti fi-N=jō?
 踊りの練習はどこですか？
 B: <ko:miNkaN>=tu ?afibinusato=nu ?a:-fīga,
 公民館とあしびの里があるけど
 <ko:miNkaN>=wa t̄fiko-timu jukkwa-fīga,
 公民館は使ってもいいけど
 nama ?utturuja ?at̄fīsa-N=gi=jō:
 今とても暑いよ。
 ja:-fīga ?afibinusato=neti fi-N-tara
 しかし、あしびの里ですら
 haro-raN-nja na-ra-N.
 払わなければならない。
 gaNfi-N-tu ?uduru=ga=du jukkwa-N=gara waka-ra-N=dja:
 だから、どちらがいいか分からないよ。
 B: ?ikkjadjo:! ?uda=neti=du fi:-ru=djo:?!
 きゃーっ！どこでやろうかな？

上に述べたように動詞・第1形容詞の-ra形は、終助詞 ja:に後接されるばあい、確認要求の疑問文のマーカーストとして用いられるが、そのようなばあいは、述語が-ra形をとらえた疑いの疑問文専用のフォーカス助詞 ga があらわれないことがないし、逆に ga があれば、疑いの疑問文としてしか捉えられない。

この ga…-ra 構造には、3つの機能・用法がある。①一番基本的な用法は、疑いの疑問文としての用法である。②埋め込み疑問文としての用法である。③因果関係の不確定を提示する原因・理由節としての用法である。このセクションでは、①のみを検討する。

ga は、述語が-ra形をとる文において疑問のフォーカスがどこにあるかをあらわす点では、用法が du と似ている。次の用例は、同じセンテンスであるが、ga によってフォーカス化される句がことなる。日本語訳では、フォーカスの対象になる句に下線がついている。

- 107) taro:=ga=ga ja:=neti fīfi kam-i-ra?
 太郎が家で肉を食べるのだろうか？
 108) taro:=ga ja:=neti=ga fīfi kam-i-ra?
 太郎が家で肉を食べるのかな

- 109) taro:=ga ja:=neti ji:=ga kam-i-ra?
太郎が家で肉を食べるのかな

述語が-ra形をとる文のフォーカス助詞 ga の使用と、それ以外の疑問文のフォーカス助詞 du の使用とは、相違点が2つある。①-ra形をとる述語の疑いの疑問文に疑問詞があるばあいは、その疑問詞が補充している欠けている情報が疑問の対象となるため、ga は、かならず疑問詞につく。

- 110) ta:=ga=ga ki:-ra?
誰が来るのだろうか？
- 111) kwa:ji=wa nu:=nu=ga ?ma:sa-ra?
お菓子は何かおいしいのだろうか？
- 112) ?ari=wa ?ikjaji=ga gaNji Jimamuni dzo:dzi ja-ra?
彼はなぜそんなに島の言葉が上手なのだろうか？
- 113) ta:=ga=ga <haNniN> ja-ra?
誰が犯人なのだろうか？
- 114) ?ikjaji=ga phi:-ra?
どうして来ないのだろうか？

「誰が何を持って来るのだろうか」のような疑問詞が2つあらわれる文においては、両方の疑問詞に ga がつく。

- 115) ta:=ga=ga nu:=ga mu-tji ki:-ra?
だれが何を持って来るんだろう？
- 116) ?atja=wa ?uda=neti=ga nu:=ga ju:-ra?
お父さんはどこで何をしているのだろうか？

②文全体が疑問の対象になっても、ga が述語につく。動詞述語文のばあいは、動詞がいわゆる連用形によって名詞化し、ji:mu 「する」がテンスマーキングを担うようになる。

- 117) wa=ga gai-tja-ji wakai=ga ja:-ra?
私が言ったのを分かったのかな？

du も同じように連用形につくが、そのようなばあいは、文全体ではなく、動作が取り立てるような重いフォーカスを受ける。次の用例は、ga と du のフォーカスのスコープの違いを示す。ga が述語になる動詞?ikkiN 「炒める」につくばあいは、a のような文全体が疑問の対象となる解釈も、b のような、「炒める」という動作のみが疑問の対象となる解釈も可能である。du が述語になる動詞につくばあいは、「炒める」という動作のみが疑問の対象となる解釈しか考えられない。

- 118) I. ?ama=ga to:gura=neti ?umu ?ikki=ga.ji:-ra?
a.お母さんが台所で芋を炒めるのだろうか？
b.お母さんが台所で芋を（煮るんじゃなくて）炒めるのだろうか？

- II. ?ama=ga to:gura=neti ?umu ?ikki=du fi-N=kaja:?
お母さんが台所で芋を（煮るんじゃなくて）炒めるのかな？

述語動詞がシテオルに相当する-tumu 継続形か、シテアルに相当する-ti ?a:mu 結果形をとり、動作がフォーカスの対象になるばあいは、-ti 中止形に ga がつき、助動詞が-ra 形をとるが、文全体がフォーカスの対象になれば、継続形のばあいは、融合形式-tumu がいわゆる連用形をとり、-tui に ga がつき、fi:mu 「する」がテンスマーキングを担うようになり、結果形のばあいは、助動詞?a:mu 「ある」がいわゆる連用形をとり、?ai に ga がつき、fi:mu 「する」がテンスマーキングを担うようになる。

- 119) I. fi:gutu fi-ra-N-gane nibu-ti=ga wu:-ra?
仕事をしないで、寝ているのかな？
II. ju: nibu-tui=ga fi:-ra?
よく寝ているのかな？
- 120) I. ?unu hanafi=wa tfukuti=ga ?a:-ra?
その話は、作ったのかな？
II. hju:=nu fu:ki=wa na: tfuku-ti ?ai=ga fi:-ra?
今日のご馳走はもう作っているのかな？

否定形をとる述語が ga によってフォーカス化されるばあいは、否定中止形-adana/-radana 形に ga がつき、無生物の存在動詞?a:mu 「ある」によってテンスが表現される。

- 121) kam-adana=ga ?a:-ra?
食べないのかな？
- 122) kam-adana=ga ?a-tta-ra?
食べなかったのかな？

この言い方は、高年層の話者にしか認められず、衰退しつつあるようである。もっと若い話者は、否定形の疑いの疑問形として kamadana=ga ?a:ra より kamaN=kaja: と kamaN=gara のほうをよく用いるようである。

フォーカスの対象になる述語が第1形容詞であるばあいは、形容詞の-sa/-ja 連用語幹に ga がつき、テンスが無生物の存在動詞によってあらわされる。

- 123) φumi=wa ta:sa=ga ?a:-ra?
米は高いのだろうか？
- 124) ?ui-fi=wa nissa=ga ?a-tta-ra?
起きろのは遅かったのだろうか？

第1形容詞の原形とされる-samu/-jamu 形は、-sa/-ja 連用語幹と無生物の存在動詞?a:mu 「ある」の縮約形であることが分かっている。ところが、正名方言では、-sa/-ja 連用語幹と無生物の存在動詞が縮約形になることが義務的ではないため、フォーカスの対象の、述語になる第1形容詞が縮約せず、?a:mu の連用形?ai が ga をとり、テンスが fi:mu 「する」によってあらわされることもある。

- 125) ϕ umi=wa ta:sa ?ai=ga ?i:-ra?
米は高いのだろうか?

話者の内省によると、ga...-ra 構造による疑いの疑問文は、独話的な用法に限られているわけではないが、対話的な用法としての使用が少ないという。なお、独話的な用法においても終助詞がつかない場合は、心内発話のような響きがあり、会話の中では、終助詞の ja:, jo:, djo: に後接されることが多い。次の用例は、判断不明の用法を示す。

- 126) ?aja=wa ?umu ?agassa=du mu-t?i
お姉さんは芋をあんなにたくさん持って
 ?uda=gat?i=ga ?ik-i-ra =ja:?
どこに行くんだろうね?
- 127) wugi=nu mu:ru hadifukki=ni ?i:-ra-tti
砂糖きびがみな台風にやられて
 ?ikja ?i:-rja=ga jukkwa-ra =jo:?
どうすればいいんだろうな?
- 128) na\phi a=gat?i ?umaga so:-ti ?ik-?i=wa ta:sa=ga ?a:-ra =ja:?
沖縄に孫を連れて行くのは高いのかな?
- 129) ?a?i=ga tu?i=wa ?ikut?i=ga ja-ra =ja:?
お婆さんの歳はいくつなんだろうな?

ga...-ra 構造による判断不明をあらわす文を wakaramu 「分からない」という動詞の補文に埋め込んでも意味がほとんど変わらない。当該構造の埋め込み疑問文としての用法の起源は、そこにあると思われる。

- 130)

?uda=gat?i=ga	?ik-i-ra	waka-ra-mu
どこに行くの <u>だ</u> ろうか?		
どこに行くか <u>分</u> からない		

次の用例は、思考過程の用法を示す。

- 131) wu-jabu-N=kaja:...?! ?abe...? taru=mu wu-ra-nu gutu ?a:-mu =djo: .
ごめんください... (いますかね) !あれっ...?誰もいないようだな。
he:sa-?iga, ?inahe hatte=gat?i ?i-dzui=ga ?i:-ra =ja:?
早いけど、もはや畑に行っているのかな?
- 132) na\phi a=gat?i ?umaga so:-ti ?ik-iwa ta:sa=ga ?a:-ra =ja:?
沖縄に孫を連れて行けば、高いのだろうかな?
- 133) A: ?unu tfa:tjabuN=wa kirasa-mu=djo:. $\text{?uda=dziho:-ti=jo:}$?
この湯飲みはきれいだね。どこで買ったのか?

- B: ʔuda=ga ja-tta-ra =jo:ʔ <ko:be>=ga ja-tta-ra =jo:ʔ
 どこだったのかな？神戸だったのだろうか？
 <o:saka>=ga ja-tta-ra =jo:ʔ
 大阪だったのだろうか？

次の用例は、疑念の用法を示す。

- 134) A: na:bjiru ʔami=nu φu-i-mu =di
 今夜雨が降ると
 gai-tʃu-jabu-ta-N =sa=ja:
 言っていましたよね
 B: gaN =jo:ʔ. ja:-ʃiga kumu=wa ti:tʃi=Ntʃu=mu na-N =ja:
 そうだよ。しかし、雲は1つさえもないね。
 φuni φui=ga ʃi-ra =ja:ʔ
 本当に降るのかな？

ga...-ra 構造には、対話的な用法の〈応答を強制しない質問〉もあるが、まれである。

- 135) A: ʔerabu=ne tukunʃima=nu tʃu:=mu wui=ga ʃi:-ra =ja:ʔ
 沖永良部に徳之島の人もいるかな？
 B: wu:-nu hadzi=dja:
 いるはずだよ。

疑いの疑問のマーカ-*gara* は、動詞と第1形容詞の第2終止形につき、第2形容詞と名詞には、直接つく。

- 136) ʔikja ja-N=gara?
 どうしたんだろう？
 137) φumi=wa mugi=jukkwa ta.sa-N=gara?
 米は麦より高いのかな？
 138) ʔari=wa ʔuda=nu tʃu:=gara?
 彼はどこの人かな？

gara の用法は、3つある。①疑いの疑問のマーカ-である。②埋め込み疑問文のマーカ-としても用いられる。③*gara* は、-tu/-tuni や、動詞やコピュラの-ti 中止形、否定形の-adana/-radana 中止形、第1形容詞の-nu 中止形などによる原因・理由節について、因果関係が不確定であることを示す。このセクションでは、①のみを検討するが、②の用法のほうが3つの中で圧倒的に使用頻度が高い。

gara の起源は、フォーカス助詞 *ga* とコピュラの-ra 形 *jara* との縮約にあると考えられる。

- 139) I. ?ari=mu masana=nu tʃu:=ga ja-ra?
↓ -ga jara → gara
II. ?ari=mu masana=nu tʃu:=gara?
彼も正名の人かな？

北琉球語群のうち、喜界島、奄美大島、徳之島以外には、ga...-ra構造が広く用いられている。名詞述語文・第2形容詞述語文にgaとコピュラの-ra形との縮約現象が方々で見られる⁵。沖永良部語も、例外的ではないが、その他の北琉球諸語に属する言語変種とことなるのは、gaとコピュラの-ra形との縮約形が疑いの疑問文のマーカ―としてkaja:などのような終助詞と似たような形態論的な分布を持ち、使用が名詞述語文・第2形容詞述語文から動詞述語文と第1形容詞述語文まで広がっている点である。次の用例では、何の違和感もなくgaraをkaja:に置き換えることができる。

- 140) wa=ga gai-tʃa-fi waka-ta-N=gara?
私が言ったのを分かったのかな？
141) ?uduru=ga ne: ta:sa-N=gara?
どれが値段高いんだろう？

garaの起源がga...-ra構造にあるのにもかかわらず、garaによる疑いの肯否疑問と選択肢疑問においてフォーカス化が起こるばあいは、duが用いられる。

- 142) ?itʃibaN dʒo:dʒi ja-tta-fi=wa
一番上手だったのは、
?anu warabi=du ja-tta-N=gara=ja:?
あの子どもだったのかね？
143) wa: saki nu-da-fi=wa ?ari=du ja-tta-N=gara?
私の酒を飲んだのは、彼だったのかな？

ga...-ra構造による文とことなり、garaによる文においては、疑問詞にフォーカス助詞gaがつくことがあるが、義務的ではない。

- 144) ?ikjaʃi=ga wa:s-a-N-gane ?umu ?itami-N=gara=ja:?
どうして煮ないで、芋を炒めるかな？

⁵ 北琉球語群のgaとコピュラとの縮約の例として次のものがある。

久米島町謝名堂方言においては、ga+je:raがge:raになる。

用例：ma:=nu tsu=ge:ra? 「どこの人だろう？」

今帰仁村謝名方言においても、ga+je:raがge:raになる。

用例：da:=nu tʃu:=ge:ra? 「どこの人だろう？」

国頭村奥方言においては、ga+jaraがgaraになる。

用例：da:=nu ttu=gara? 「どこの人だろう？」

garaによる疑いの疑問文は、独話的な用法がもっとも基本的な用法である。次の用例は、判断不明の用法を示す。AとBは、第3者である?agari=nu ja:=nu gja:gja 「東の家のおじいさん」がなぜ英語が上手かが分からない。Aは、Bが知っているかどうか分からないため、kaja:によるいわゆる〈応答を強制しない質問〉でBの反応を引き出そうとしているが、Bは、garaによる文で判断不明であることを表現している。

- 145) A: ?agari=nu ja:=nu gja:gja=wa
 東の家のおじいさんは、
 ?ikjafi <je:go> gaNji dʒo:dʒi=kaja:?
 なぜ英語がそんなに上手なのかな？
 B: gaN=ja:.. ?ikjafi ?ubi-ta-N=gara=ja:?
 そうだね。 どうやって覚えたんだろうね？

6. 修辞疑問：非難の質問文

修辞疑問では、話し手が聞き手に問いかけているが、話し手には、不明な点がなく、聞き手に回答を求めるわけでもない。正名方言では、修辞的な肯否疑問文で nja/na が、修辞的な疑問詞疑問文で-jo が用いられるが、語根につく o:/ro:も用いられる。この語尾は、〈表出〉という意味でも用いられるが、疑問文においては、修辞的な意味しかない。-o:/ro:は、肯否疑問文でも、Nga（なぜ）による疑問詞疑問文でも、修辞疑問のマーカースとして用いられる。聞き手の行為に対しての話し手の非難をあらわすことが多い。

- 146) ?usu-timu ?uNk-i-nu gi:=nu ?a-ro:?
 押しても動くわけがあるもんか？
 147) ?ura=ni ji-ra-ro:?
 あなたにできるもんか？
 148) Nga waro-ro:?
 どうして笑うか？
 149) ?ura=wa Nga gaNji <kitana>-sa-ro:?
 あなたはどうしてそんなに汚いか？
 150) Nga ?ura muni=nu wa:fa na-tta-ro:?
 どうしてあなたの言葉がおかしくなったか？

動詞の否定形が述語になるばあい、-no:になる。

- 151) Nga φu:-no:?
 どうして来ないか？

-no:は、勧誘的な意味でも用いられる。

- 152) tʃa: ?oifi-ra-no:?
 お茶を召し上がりませんか？

コンピュータは、-o/-ro:をとらない。コンピュータが形態論的なマテリアルを担う第2形容詞が述語になる文、および名詞述語文では、上で疑問詞疑問のマーカ―として述べた-joが用いられる。動詞か第1形容詞が述語になる文でも-joが非難的な修辭疑問のマーカ―として用いられる。そのようなばあいでは、肯否疑問にも用いられる。

- 153) Nga gaNji <heta>=jo?
どうしてそんなに下手か？

nja/na が修辭的疑問で用いられるばあい、終助詞 djo:がつくことが多い。

- 154) ?ura=ga gai-tfimu ?ari=ga kiki-N=nja =djo:?!
あなたが聞いても彼が聞くもんか？！

jo が修辭疑問で用いられるばあいにも、終助詞 djo:がつくことが多い。

- 155) nu: ju-N=jo=djo:?! nama ?ik-a-N-nja na-ra-N =doja:
何をしてるんだよ？！今行かなければならないよ。

7. 意志の疑問文

正名方言の-(r)a(:)による意志勧誘形は、話し手の行為を前提として、聞き手に行為の実行を誘いかける用法もあり、話し手が発話時からとる行為に決意したことをあらわす用法もある。当該方言における意志の疑問は、意志勧誘形の2つ目の意味から派生した。

意志勧誘形に疑問助詞 i がつく意志の疑問形は、話し手が聞き手のために行おうとしている行為を聞き手が受け入れるかどうかを問うばあいに用いられる。-(r)a:のように長音でおわる接辞をとる動詞もあり、そのようなばあいに i がつくと、超重母音をさけるために短音化がおこる。

「とろう」 tura:i > *tura:ɨ > tura=i 「とろうか」

意志勧誘形+i は、①話し手に不明な情報があるため判断がなりたたず、②聞き手に問いかけることによって疑問の解消をめざすという2つの基本的性質があるという疑問の典型的な特徴を2つとももっていると言えよう。話し手は、行為を実行する気があるが、聞き手がその行為をしてほしいと思っているかどうか話し手にとって不明であるため、実際に行うか行わないかを聞き手に問いかける用法である。

次の用例では、話し手には、聞き手のグラスにビールを注いであげるとい意志があるが、聞き手がビールを注いでほしいと思っているかどうか話し手にとって不明であるため、話し手が意志勧誘形+i を用いて、聞き手に問いかけている。

- 156)A: <bi.ru> tfig-jabu-ra=i?
ビールを 注ぎましょうか？
B: ?i, tfig-i
うん、注げ。

次の用例では、話し手には、聞き手の荷物をもってあげるという意志があるが、聞き手が荷物を持ってほしいと思っているかどうか話し手にとって不明であるため、話し手が問いかける。

- 157)A: waga mutt-a=i?
私が持とうか?
B: mihe dero!
ありがとうございます!

参考文献

- 上村, 幸雄; 須山, 名保子 (1997) 「奄美方言」 亀井, 孝; 河野, 六郎; 千野, 栄一 編 『言語学大辞典セクション 日本列島の言語』 431-459. 東京: 三省堂
- 狩俣, 繁久; 島袋, 幸子 (2006) 「琉球語の終止形: 沖縄謝名方言と沖縄安慶名方言」
- かりまた, しげひさ; 島袋, 幸子 (2007) 「沖縄方言のとりたてのくつつきとかかりむすび: 今帰仁謝名方言と具志川安慶名方言のばあい (おぼえがき)」, 『日本東洋文化論集』 (13): 1-29
- 菊, 秀史 (2007) 「与論の言葉で話そう ユンヌフトゥバではなそう (2) —動詞を覚えよう (文法・文型編)」 与論民族村
- 白田, 理人 (2013) 「奄美語喜界島小野津方言の談話資料」 田窪 行則 編『琉球列島の言語と文化: その記録と継承』 259-290 東京: くろしお出版
- 徳永, 明子 (2014) 「沖永良部島国頭方言の動詞形態論」 2014年3月14日に沖縄県立博物館で行われた発表の資料
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 「現代日本語文法 4第8部モダリティ」。東京: くろしお出版
- 三石, 泰子 (1993) 「名瀬市の方言」 東京: 秋山書店
- 宮崎, 和人; 安達, 太郎; 野田, 春美; 高梨, 信乃 (2002) 「モダリティ」 仁田, 義雄; 益岡, 隆志; 田窪, 行則『新日本語文法選書4』 東京: くろしお出版
- 宮良, 信詳 (1995) 『南琉球・石垣方言の文法』 東京: くろしお出版
- Van der Lubbe, Gijs & Akiko Tokunaga (2015) “Okinoerabu grammar” in: Patrick Heinrich, Shinsho Miyara and Michinori Shimoji (eds.): *Handbook of the Ryukyuan Languages*. Berlin / Boston: Mouton de Gruyter: 345–377.
- Niinaga, Yuto (2014) “A Grammar of Yuwan, a Northern Ryukyuan Language” Unpublished PhD. thesis, University of Tokyo
- Shimoji, Michinori (2012) ‘Northern Ryukyuan’ in Tranter, Nicolas (ed.) *The Languages of Japan and Korea*, Oxon / New York: Routledge
- Van der Lubbe, Gijs (2012). The Okinawan Language of Janadō Village on Kume Island: A Grammar Sketch. Unpublished MA thesis submitted to Leiden University, The Netherlands